



邦語独逸文典

五高時代の唯一の著作に『邦語独逸文典』がある。該書は博文館の帝国百科全書の第六十四編として、1901年（明治34）1月に出版された。A5版、全226頁。これにはハードカバーの上製と小口マール装の並製があった。「邦語」という言葉は現代の読者にはいささか違和感を与えるかもしれないが、明治期にはドイツ文法は原書を用いるのが一般的であった。特に学校教育ではそうだった。明治30年頃は『ジャーマン・コース』やオットー『独英会話文典』など英文の教科書が広く用いられていた。青木の本は原書を読むための参考書として編まれたものだった。「独逸文典ノ初歩ヲ修メテ片々ノ知識ヲ有スル者ニ幾分カ系統的ノ知識ヲ与ヘテ以テ原書ノ文典ノ了解ヲ容易ナラシメント本書編纂ノ元来ノ目的ナリ…」（凡例）。だが、原書

を読む暇がなく直ちに専門の学術書を読もうとする人のことも多少配慮して編纂したため「時ニ理論ニ走り時ニ実用ニ偏キ首尾一統ヲ欠」いたことを青木自身認めている。全体は8章から成る。第1章「詞ノ品詞」に始まり、名詞・代名詞・数詞・形容詞・動詞・前置詞・副詞の順に論述している。特に動詞と前置詞に多くの頁を割いている。前置詞については本文を補うために巻末において用例を多数挙げて再説している。全体として説明は簡潔に、用例は豊富にという編纂方針が採られているようだ。これは、前記の英文の文典やそれ以前に広く用いられた『シェーフェル独逸文典』に倣ったものであろう。

青木は1901年（明治34）8月23日付で仙台の二高教授に転じた。そして翌年3月今度は『邦語独逸文章論』（博文館）を上梓した。A5版、全268頁。「凡例」に明治34年11月の日付があり、分量の多さを考えると大部分は熊本で書いたのではあるまいか。文典は詞論と文章論から成るべきだと考える編者にとって（英文・独文の原書においてはそれが普通だった。）詞論である前著だけでは不十分だった。なお、青木は接続詞はその性質上、文章論において扱うのが適当だとし、本書の中程でその意義・用法を詳述した。

若き日の湯原元一とテオドール・ケルナー論

湯原元一は履歴書（文部省所蔵）によると、文久3年8月12日肥前国佐賀に生まれた。父は佐賀県士族の湯原繁一。旧名石井袈裟四郎。後年、易水と号したが、これは湯の字を二つに分けたものである。1880年（明治13）11月、東京大学医学部予科に入学した。予科の試験にはドイツ語、漢文、数学の3課目があった。それで湯原元一はドイツ語を学ぶために、当時の医学志望者の多くがそうであったように東京・本郷台町の独逸学校に学んでいる（『独協百年』第4号所収「旧独逸学校出身者会々員名簿」参照）。その甲斐あってか『東京大学医学部一覽』（明治13、14年）を見ると、湯原は「医学四等予科甲生」の組に編入されている。この組には川室圭吾、山田郁治、福島鳳一郎など後年ドイツ語教師になった人の名も見られる。入澤達吉

は「湯原元一君の印象」(『雲莊隨筆』所収)中で、医学部予科時代の湯原は40人の級中で実に白眉であったと書いている。

1984年(明治17)11月東京大学予備門を卒業した。その時の「卒業証書」(五高記念館所蔵)には校長の杉浦重剛以下、履修科目と担当教員の署名・印が見られる。独逸語学(川上正光)、独逸語学・ラテン語・地理学(グロート)、数学(村岡範為馳)、物理学(飯盛挺造)、金石学(熊沢善庵)、動物学・植物学(松浦新之助)、史学(オットー・ゼン)、史学(田中稻城)等である。



湯原元一

グロートには愛されたようで、入澤の前記の文章にも、「湯原君もグロート先生の独逸語の門人である。特に君は先生とは親しみが深かった」とある。湯原は後年、1911年(明治44)、帰国してベルリン郊外ニコラスゼーに隠棲していた旧師グロートを訪ねている。

さて、その後湯原は東大医学部本科に移り、3年間修業したが、明治21年に至り、一転して教育界に身を投じ福岡県尋常中学校校履教員になった。さらに翌年県立尋常中学修猷館教員になったが、24年に至り山口高等中学校教授に任命され、ドイツ語、歴史、博物を担当した。当時の山口高等中学校は教則その他の組織を帝国大学文科大学教師ハウスクネヒトに作成して貰って、その指針に従って実施された。その際ハウスクネヒトはドイツのギムナジウムの制度を参

考にした。さて、明治23年1月から27年7月まで山中高に学んだ登張信一郎(竹風)は「ドイツ語懺悔」(『登張竹風遺稿追想集』所収)の中で湯原のドイツ語の授業について次のように語っている。

「一応の文法をコムフォートのジャーマン・コースに学び、初歩のドイツ語をブッハイムの近代読本で教へられた吾等は、次に教科用に作られたミュラーのドイツ史を読み、その次にはゲーテのヘルマン・ウント・ドロテア、シラーのキルヘルム・テルに移り、本科生となってから、宗教教育の意味でフライタクのマルティーン・ルター、最後にシラーの論文集を読ませられた。その論文の一つでパン学者と純学者との区別を叩き込まれて眼を見張らされたものだった。申さば学者といふものについて、学者の本領神聖さについて、その清浄境について、従来少しも知るところのなかった吾等に、パン学者のこゝしか心得てゐなかつた無智文盲の私に、学者の開眼をして呉れたのは実にこのシラーの論文であり、それを得意の識見と弁舌で、解明至らざるところなく、豊富な史観からの確な例証を挙げて、縦横無尽に、シラーの原文をおもしろく訳し行きながら、湯原先生自から純学者の肌合に惚れ込んでゐられる恰好で、満面を紅潮させて、学者の為に万丈の気焰を吐かれた颯爽たる意気、今思ひ出しても愉快である。その時まで、まだ多少ぐらついてゐた私のドイツ文学科への志望は、このシラーの論文によって、先づ動きなく、確定せしめられた、と言って可い。」



テオドール・ケルナー

登張は湯原のドイツ語授業を「さながら科学的とも方法論的とも申すべきほどの秩序整然たるもので」であったが、それはハウスクネヒトの「虎の巻」に由来するものであったと述べ

ている。この「虎の巻」とは、ハウスクネヒトの意見書『山口高等学校教則説明書附録』所収の「独逸語教授法」を指す。ハウスクネヒトのドイツ語教授法はヘルバルト流の五段教授法に基づくもので、日本では先駆的のものだった。だが実際の授業にその教授法を取り入れるのは困難だった。ただし彼が選んだ教科書ジャーマン・コースとブッハイム読本だけはその後日本で広く用いられるようになった。それだけに湯原がハウスクネヒトの教授法に沿って授業を行ったことは注目される。

登張は「湯原易水先生の本領は先生としては寧ろ専門以外ともいふべきあの国史にあったと云ってもよろしい。(中略)先生御自身はドイツ語の教師たるよりも寧ろ国史の教師たることを喜んでおられたやうである。その史学に於ける造詣は、その漢文漢詩のそれと共に、実に大したものであった」と述べ、ドイツ語の教え方も独語そのものを叩き込むというより、独語の特質、ドイツ人の本領を知らしめるのが目的であったという。

五高記念館所蔵の履歴書によると、湯原は明治27年1月には私立防長教育会長の公爵毛利元徳より山口学校長を依頼された。(同年7月31日まで)

1894年(明治27)7月31日付で第五高等学校のドイツ語授業を囑託された。次いで翌年6月第五高等学校教授に任命された(高等官8等)。ここでは龍南会の演説部長なども務めた。だが明治29年3月には宮崎県から招聘され、宮崎県尋常中学校長に任命されたので、熊本時代は2年足らずで終わりを告げた。それでもこの間五高校友会の『龍南会雑誌』には「何をか歴史といふ」(第30号、31号、明治27年11月3日・28日)「武士道の趣味」(第37号、38号、明治28年6月7日・30日)等4編の論文を寄稿した。

明治時代のドイツ語学者の中には翻訳等を通してドイツの教育学を日本に紹介した人が少なくない。寺田勇吉、大村仁太郎、山口小太郎、藤代禎輔など皆そうである。湯原元一には特にその傾向が顕著である。ドイツ語学者というより教育学者といった方がいい位いだ。そのためかドイツ文学に関する著作は少ない。その中で湯原元一撰『画趣及び詩味』(明治36年)であろう。レッシングの『ラオコーン』の梗概を述べたものだが、批評文学の古典を相当深く理解し、要領よく紹介した注目すべき仕事であった。

『画趣及び詩味』ほど知られていないが、湯原の歴史好き、愛国主義といった特色がよく現れているのが「軍国詩人テオドル・ケルネル」と題する評伝で、明治38年3～5月号『時代思潮』誌上に3回にわたって掲載された。丁度、日露戦争の最中であった。そのせいか、湯原はこれを大変な意気込みで書いたことが全体から感じ取られる。

テオドル・ケルナー(1791-1813)の父クリスチャン・ゴットフリート・ケルナーは官吏で神学者でもあったが、シラーの親友として知られる。息子のテオドルも、その関係もあってシラーの影響を強く受けた。裕福な家庭に育ち、また父のお陰で多くの知名の士に誘掖され、何等の後顧の憂いもなく学業に専念でき、加えて文学的才能も早く現れ、ウィーンの帝室劇場付きの詩人となったのは僅かに23歳だった。社会的地位も安定し、いよいよ文壇にその驥足を伸ばそうとした時、彼の生涯に一大転機をもたらす事件が起きた。久しく欧州を席卷していたナポレオンがモスクワで敗退し、プロイセンはじめドイツ諸国は積年の怨恨を晴らす好機なれりと、競ってドイツの自由と独立のために立ち上がった。

ケルナーは以前よりナポレオンの横暴に憤り、独逸国民の屈辱を座視するに忍びず、機会が

あれば義勇軍に参加することを考えていた。モスクワ敗退の報は至る所歓声を以て迎えられ、ヴィルヘルム3世は国民に檄を飛ばしてナポレオンを撃たせしめた。ケルナーは直ちに身を起こしてリュッツオーの義勇軍に投じた。義勇軍は彼の作った愛国詩に励まされつつ、奮戦して、功名手柄があった。彼自身も各地で戦争に参加したが、遂にガーデンプッシュ付近で戦死した。

ケルナーの戦死が一度世に伝わるや、皆その早世を悼んだ。「若しこの人にして世を永うしたらんには、その詩人としての成功は古今に絶くべかりしに、軍国の為とはいへど惜しむべきことなりと思ふは、当時独逸の上下をなべての人の心なりき」。英国では詩人の死に対して特に反響があり、詩や著作が紹介され、翻訳も出た。また当時敵国だった仏蘭西の文壇さえ彼の著作には多大の敬意が表された。

詩集『琴と剣』(Leier und Schwert)にはよく詩人の一生の本領が現れている。「蓋し彼れが平生の主張は詩を以て国語を救い、剣を以て自由を濟はんとするにありき。(中略)彼れは名誉の戦死を以て、凡そ人間の遭遇する最も羨むべき運命の一なりと確信せり」。ために彼は戦時中何度か生死の間を彷徨ったが、毫もこれを意に介せず、益々その所信を固め、いよいよ勇気を奮い身を以て国難に殉ずることを誓った。湯原はケルナーの名は萬世に朽ちないのみならず、『琴と剣』は「最も著しき程度に於て、創才の痕跡を留め、総て優さしく、且深き感情を呼吸するを見る。読者に詩編の意気を紹介するに極めて適当なる気力も具はりて、而かも青年粗漫の気を見るは僅かばかりの処あるのみ…」という批評家チードゲスの言葉を引用した後、数編を取り上げ論評している。

「陣頭の祈祷」(Gebet von der Schlacht)は、ケルナーの堅固不動の信仰を知るに足る作品であるのみならず、キリスト教国民が神と戦争との関係について、如何なる思想を抱いているかを窺えるものだと、これを讚美歌風に訳している。

「劔の歌」(Schwertlied)は、詩人の戦死の僅か2、3時間前に成った絶筆である。内容はケルナーと劔との問答であって、互いに相愛し、相寄る趣を述べている。そして、壮年士官の意気が行間に溢れている。「劔に問ふ、何が故に喜べる色ある。劔は答ふ、勇士の我を帯ぶるが故なり。劔に言ふ、余の汝を愛するは新婦に過ぐ。劔は問ふ、然らば婚期は何時ぞ。劔に答ふ、喇叭響き、砲撃轟く時。…」と続く。劔を新婦に譬え、これを抜いて闘うのを結婚式に比したのは東西の習俗の相違を感じさせ、この詩を翻訳するのは困難だ、と湯原は述べている。

最後に湯原はケルナーの愛国詩の中で最も有名で当時人々に深い感動を与えたという「男子及び悪少年」(Männer und Buhlen)を取り上げる。この詩は1813年フランスとプロイセンとの平和談判が破裂して、その年の8月17日に再び戦争が開始した時の作である。かなりの長詩である。主意は世の無頼壯年が戦陣中の労苦を思わず飽食暖衣するのを憤慨し、警告したものである。詩の毎節毎に「最も厳格悲壮なる戦場生活と、無頼壯年の墮落生活とを両々対比する処、事実には如何にも痛切なれども、そのコントラストの余りに激しさと、且その用語の動もすれば鄙猥に流るゝとに因りて我が国民の趣味には必ずしも投合すべしとも覚えざれど」、とにかく当時国民の士気を鼓舞するに絶大な力のあったケルナーの一生の大作なので、と言って湯原は全体を訳している。こなれたな訳ではないが湯原は余程この詩が気に入っていたらしい。

明治時代にはケルナーはじめアルント、シェンケンドルフなどの愛国詩がもてはやされ、その漢詩訳なども現れた。新渡戸稲造の『武士道』でもケルナーに言及している。